慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中世ヨーロッパは超自然をどうとらえたか : 12世紀イングランドの死後世界とヴィジョン
Sub Title	Supernatural and afterlife in the Middle ages, with special reference to the 12th-century England
Author	松田, 隆美(Matsuda, Takami)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.104, (2013. 6) ,p.112(233)- 125(220)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2012年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム : ヨーロッパ文学の深層 : 古代・中世からの呼びかけ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01040001-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2012年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム
ヨーロッパ文学の深層 ── 古代･中世からの呼びかけ

中世ヨーロッパは超自然をどうとらえたか
── 12世紀イングランドの死後世界とヴィジョン ──

松田　隆美

1066年のノルマン征服以降、イングランドは、ラテン語、アングロ・ノルマン語（ブリテン島で使用されたフランス語）、英語、そして政治的に抑圧されたが故に独自性を保とうとし続けてきたケルト系諸語（ウェールズ語、アイルランド語、コーンウォール語など）がそれぞれ文学語として機能する複数言語文化の時代をむかえる。その盛期はヘンリー二世の治世（1154–89年）である。アンジュー伯アンリは、相続とアリエノール・ダキテーヌとの結婚 (1152年) により、すでに大陸においてノルマンディー、アキテーヌ、ガスコーニュ、アンジューを所有していたが、イングランド王ヘンリー二世として即位することで、加えてイングランドとフランス西部の大部分を手に入れ、英仏にまたがる広大な王国―いわゆるアンジュー帝国―が誕生したのである。ヘンリー二世はロンドン、ウィンチェスター、ルーアンなどを巡歴し、王の宮廷や後年ヘンリーと別居したアリエノールのポワティエの宮廷には、イングランド出身の作家のみならず、南仏のトルバドゥールも含む大陸の作家たちも訪れ、複数言語による創作の場が整備された。12世紀には英語による文筆活動は低迷したが、一方で英語以外の言語、特にラテン語とノルマン征服で宮廷の言語となったアングロ・ノルマン語による創作が栄えた。マリ・ド・フランスのレをはじめとして、中世フランス文学の初期の作品の多くがイングランドでアングロ・ノルマン語で記され、さらに12世紀から13世紀初期にかけてイングランドで生

まれたラテン語文学は、Rigg が指摘したように、その質と量において同時代のヨーロッパのなかで傑出している。[1]

この時期にラテン語で著された著作には、ブリテン島やノルマンディー地方の歴史や地誌を扱った作品がある。それらは編年体の年代記の体裁をとりつつも、過去に起きた奇蹟、驚異、珍事など、ひろく超自然的と形容できる出来事を意図的に集めて記録しており、逸話集的な性質を有している。後述するオルデリクス・ウィターリス『教会史』(Ordericus Vitalis, *Historia Ecclesiastica*; c.1123-37) やウォルター・マップ『宮廷閑話集』(Walter Map, *De Nugis Curialium*, 1159) がその好例である。奇蹟や驚異は修道院で編纂された説教用の例話集でもその中心を成している。特に、1153 年のクレルヴォーのベルナルドゥスの死後シトー会は、会の権威と優位性を喧伝する目的もあって例話集を積極的に編纂し、クレルヴォーのヘルベルトゥス『奇蹟の書』(Herbert of Clairvaux, *Liber miraculorum*, 1178) やハイステルバッハのカエサリウス『奇蹟をめぐる対話』(Caesarius of Heisterbach, *Dialogus miraculorum*, c. 1219-23) が誕生した。[2]

これらの著作で取り上げられた超自然現象のなかでも、死後世界や死者の霊に関わるものは特に興味を引いたと言える。霊が一時的に肉体を離れて死後世界を巡る探訪譚や幽霊の出現に関する話は、中世初期から 15 世紀に至るまで途切れることなく書き続けられ、中世文学を代表するナラティブ・ジャンルであった。12 世紀から 13 世紀初期かけては、特に独創性に富んだ作品が書かれ、その代表例である『トヌグダルゥスの幻視』(*Visio Tnugdali*, 1149) や『聖パトリキウスの煉獄譚』(*Tractatus de Purgatorio Sancti Patricii*, *c*.1180-84) は、いずれもブリテン諸島にゆかりのある作品である。本稿では、いわゆる幽霊にまつわるいくつかのテクストを例として、中世のナラティブの物語的、主題的な根幹をなしている「超自然」に対する認識が、時代とともにいかに変化したかを具体的に考察する。

超自然をどう解釈するかは中世の世界観の基底を成しており、12 世紀はこの点でひとつの変化がみられる時代である。アウグスティヌスは、全て

は天地創造という最初で最大の奇蹟から生じ、世界は最初の六日間で、未来の全ての可能性をあらかじめ内在して創造されたと指摘する。その意味では、全ての事象は、自然、超自然にかかわらず奇蹟であり、日常は日々の奇蹟の連続と言える。感嘆の対象には、日常的に観察される事柄で賢者には善なる神のしるしとして理解され得るもの、自然の働きを知っている賢者には普通のことだが無知な者には驚きの対象となるもの、神の力によって超自然的に引き起こされる真の奇蹟の三種類があるが、どれも神の業であることに変わりはない。[3]その一方ですべての説明がつかないものが神による奇蹟とは限らない。そこには、一見奇蹟のように見えても実はダエモーン ── 人間の姿を含む様々なかたちを装う悪霊 ── によるまやかしである場合が存在する。したがってその識別が重要となる。

> 悪しき霊がいわばきわめて平静に業を行ない、身体の苦悶も伴わず、人間の霊に乗り移って、自分に出来ることを語る場合、その識別はまことに難しい。まさに真なることを語り、有益なことを予言し、「光の天使を装う」(「2コリント」11.14) と書かれてあるごとくに変装し、人が明らかな善として信頼を寄せるのに乗じて、自らの目的の為に誘惑するのである。これを見分けるのは、使徒が様々の賜物について語る中で、「ある人には霊を見分ける力」(「1コリント」12.10) と述べた賜物による以外にはないとわたしは考える。[4]

中世を通じて、霊を識別する力 (discretio spirituum) は超自然と対峙する際の本質で、正しい識別のためには霊の受け手の徳の高さや識別を助ける精神的な師の存在が重要とされた。[5]

アウグスティヌスは霊の識別の原則によって奇蹟の領域を限定したが、悪霊のまやかしでないものは全て、究極的には神の創造に基づく奇蹟ととらえている。12世紀のアンセルムスは、アウグスティヌスの三つの分類を敷衍して、物事の原因に関して論理的に三通りの可能性を想定している。

> こと細かく観察すると、全て発生する現象は神の意志のみで行われるか、神によって授けられた力に従い自然によってなされるか、被造物の意志によってなされている。そして、創られた自然でも被造物の意志でもなく、神のみが行うことは常に奇蹟的なことである。こうして明らかとなるが、物事の推移には三通りあり、それは、奇蹟的なこと、自然的なこと、意志的なことである。そして奇蹟的なことはほかの諸事あるいはそれらの法には決して従わず、それらを自由に支配している。[6]

三通りのうち、神が直接に関与してなされる場合が奇蹟であり、その因果関係に法則性はない。一方で他の二通りについては、そこに具体的原因を探ったり、法則性を見いだしたりすることは可能である。アンセルムスは、全ての現象は本質的には奇蹟であるというアウグスティヌスの前提を認めつつも、世界は基本的に自然の法則に基づいて存在しており、その法則性を超えた神の直接の関与のみに奇蹟という呼称を与えている。そうして奇蹟を限定的に例外としてとらえることで、逆に、一般的な事象を支配している法則、自然な因果律の存在にも光を当てることとなる。

一見超自然と見えることでも実は自然の原因（ratio）に従っているのではという疑問は、たとえばギラルドゥス・カンブレンシスの『アイルランド地誌』(Girardus Cambrensis, *Topographia Hiberniae*, c.1188) にも一貫して認められ、著述の基盤をなしている。[7] 自然の法則に基づいた因果関係という第二の原因をまず検討し、それで説明がつかないときのみ奇蹟の可能性を持ち出すのである。

このように、奇蹟とは神が直接に介入して通常予想される自然の法則が破られる現象であると限定すると、自然の法則で説明がつくものと奇蹟との境界線上に、さまざまな一見超自然にみえる事象が浮かび上がってくる。それについては、ティルベリのゲルヴァシウスが、ヘンリー二世の宮廷でヘンリー王子のために執筆を始めた逸話集『皇帝の閑暇』(Gervase of Tibury, *Otia Imperialia* 1209-14) において、奇蹟 (miracula) と驚異 (mirabilia)

の区別として述べている。

> そこから、二つの現象がでてまいります。すなわち《奇蹟》と《驚異》で、どちらも「感嘆」という目標をもっています。さて、《奇蹟》という言葉を、わたしどもは、ごく日常的には、自然の法則に従わず、全能の神の力にわたしどもが帰している物事のことだと理解しております。たとえば、妊娠する処女だとか、死から蘇るラザロだとか、萎えた手足がふたたび使えるようになるといった類のことです。そして《驚異》という言葉では、自然のものでありながら、わたしどもの理解を越えた物事を指すととらえています。しかるにじつは、《驚異》を創るのは、ある現象の原因を説明することのできない、わたしたちの無知なのだというべきです。[8]

人間の無知のせいで説明がつかず超自然に見える事象を、奇蹟とは区別して「驚異」と定義することで、超自然の領域を狭めると同時に、それが理性的に解明されることを潜在的に前提としているのである。

死者の霊をめぐる超自然現象の解釈も、その説明可能性をめぐる前提の変化との関連で考えられる。12世紀は中世の死生観の重要な転換期で、ジャック・ル・ゴッフが指摘したように、12世紀後半に死後世界の地理に、天国、地獄と並ぶ第三の場所として煉獄が登場し、その存在は最終的に第二回リヨン公会議(1274年)で教理化される。煉獄は、生前にやり残した罪の償いを死後の責め苦によって完遂することが許される場で、そこでの滞在期間や苦しさの度合いは、やり残した償いに応じて一人一人異なり、さらにそれは生者の執り成しの祈禱や喜捨によって短縮、軽減されると考えられた。煉獄の確立は、最悪でも罪を悔いて死にさえすれば、煉獄で償いをすませてから天国に行くことができるという現実的な救済ルートを生み出しただけでなく、[9]幽霊という超自然現象の定義も左右することとなる。以下、幽霊をめぐる2つの話の分析によって、その変化を検討することと

する。

最初の例は、イングランド出身の聖職者オルデリクス・ウィターリスが著したイングランドとノルマンディーの歴史書、『教会史』のなかに1091年１月１日の出来事として登場する、「ヘルレキヌスの一党」として知られる幽霊の軍勢の話である。[10]同種の現象は古くはタキトゥスの『ゲルマーニア』にも言及されていて、12 ～ 13世紀の複数の著述家によって取り上げられている。[11]

ウァルヒェリンという名の司祭が夜、人里離れたところを歩いていると、軍勢の行軍のような一団と遭遇する。そのなかには最近亡くなった近隣の人たちが何人もいて、彼らは罪の「償いを終えることなく死んだ」ため、生前に犯した罪に応じてさまざまな責め苦を被っているのである。ウァルヒェリンはこれが「ヘルレキヌスの一党」に相違ないと思うが、「何か確かな証拠を生きている人々に示すことができなければ、私のヴィジョンを説明しても、誰も私を信じてはくれない」と考え、軍勢のなかの乗り手のいない馬を一頭捕まえて、証拠に連れて帰ろうとする。その行為が一党の騎士に見つかり逆に捕らえられるが、最終的に騎士のひとりから家族への伝言を頼まれることになる。その騎士はバルノンの息子ギョーム・ド・グロと名乗り、生前に犯した様々な罪、とりわけ借金の形に取り上げた担保を不当に自分の相続人に残したせいで、口の中にルーアンの城よりも重い燃える挽き臼の心棒を置かれて苦しんでいるので、不正をただして自分が責め苦から解放されるように執りなしをするように妻と息子に伝えて欲しいと言う。ウァルヒェリンはその話をにわかに信ずることが出来ず伝言を拒むが、ギョームは「目に見える証拠をいくつも (plurima notissimaque signa)」示して、執拗に頼み続けるのである。ウァルヒェリンはついに騎士に喉元をつかまれて火傷を負うが、しかしそこに死んだウァルヒェリンの兄弟があらわれて窮地から救われる。兄弟は金髪のラルフの息子ロベールと名乗り、やはり自分が受けている責め苦について詳しく語り、祈りと施しで自分のために執りなしてくれるようにと、やはりウァルヒェリンに頼むのである。

この逸話には死後の責め苦をめぐって二つの異なる立場が示されている。ウァルヒェリンが最初に出会う死者の一団は、生前に悔い改めなかった罰として責められており、彼らの苦しみに何らかの償罪効果があるとは示されていない。12世紀において幽霊とは、魂が悪霊や悪魔にとらえられて、罪ゆえに奇形化した肉体に戻された結果とみなされることが一般的で、その存在は基本的に邪悪なものであった。[12] この一団はそうした忌まわしく恐ろしい死者の軍勢である。一方で、後半のギョーム・ド・グロは責め苦からの解放を期待しており、同様に、ウァルヒェリンの兄弟も「シュロの日曜日から一年の内に、創造主の慈悲によって救われ、全ての責め苦から解き放たれたい」と述べている。「ヘルレキヌスの一党」は、地獄にいて永劫の刑罰を受けているとも、浄罪のために煉獄に一定期間留め置かれているとも解釈できるのであり、記述に一貫性はない。しかし、この記述を通底している姿勢は神学的と言うよりも教訓的なもので、罪を犯したまま死ぬと死後にその報いを受けることを具体的に示すとともに、生者による執りなしの有効性も矛盾を恐れずに強調している。その背後には、世界を神の手によって書かれた一冊の驚嘆の書とみなし、その至る所にみられる神の痕跡（驚異）を、それらが教訓として用いられるように、歴史のなかから救い出して記録することが執筆の目的であるという、オルデリクスの姿勢が見える。[13] その意味ではオルデリクスの超自然に対する視点はアウグスティヌスに通じる伝統的なものであったと言えるが、一方で、目に見える証拠によって真実性を証明しようとする理性的な姿勢は、幽霊にもウァルヒェリンにも共通して見られ、オルデリクス自身もウァルヒェリンの火傷のあとを自分の目で見たことを挙げて話の信憑性を主張している。そこには、一見説明がつかない超自然的な出来事を驚異として受け入れるにあたって、理性のフィルターを通す姿勢も同時に見られるのである。その背景には、Chenu や Murray が指摘するように、プラトン主義的な法則性の重視や自然界そのものへの興味の高まりがあったと言えるだろう。[14]

オルデリクスが取り上げたウァルヒェリンの話は同時代の驚異だが、ヘンリー二世の宮廷に仕えていた聖職者ウォルター・マップは『宮廷人の閑

話』のなかで、類似した話を過去の出来事として語っている。古代ブルトン人のヘルラ王が小人族（ピグミー , pigmeus）の王の祝典に招かれて、三日間を小人国で過ごして帰還したところ、じつは200年以上が経過しており、イングランドはすでにサクソン人の時代になっていた。ヘルラ王は、小人国を去る際に子犬を与えられ、それを抱いて馬に乗って帰ってきたが、小人に、子犬が自ら地面に下りるまでは下馬してはならないと警告され、またそれを無視して下りた家臣が一瞬のうち塵となってしまったため、王の一団は騎乗のまま、未だにさまよっている。しかし、マップはこの逸話を以下のように締めくくっている。

> そしてこの話によると、ヘルラ王は未だに立ち止まることも無く、一党を引き連れて狂ったように、永遠にさまよっているという。一党を目にしたと主張する者は多い。しかし、私たちのヘンリー王の治世一年目には、軍勢を率いて私たちの王国を訪れることはなくなったという。その年に、ヘレフォードのワイ川に飛び込んで沈んでいったのが、多くのウェールズ人によって目撃されている。その時以来、まるで放浪を私たちにゆだねたかのように、幽霊の行軍 (fantasticus ille circuitus) は止んだのである。[15]

マップは、このヘルラ王の一行を「ヘルレキヌスの一党」と呼んでおり、[16]その意味では小人国は煉獄的な死後世界であると解釈可能である。[17]しかし、この逸話にはオルデリクスに見られたような地獄的要素も教訓的意図も希薄であり、より純粋なかたちで驚異として提示されている。マップは幽霊 (fantasma) について、悪魔が神の許可を得て我々に見せるまやかしで、害をなすこともなさぬこともあると定義し、それがいかに非現実的 (fantasticus) であろうとも、人智を超えた神の業であると強調している。[18]そこには、驚異を理性的に説明したりキリスト教教理のなかに論理的に位置づけようとする姿勢は認められない。むしろ特徴的な点は、驚異は過去の出来事であり、かつて存在した超自然的事象が消滅してゆくという、一

種の無常観にも近い歴史感覚である。同様に、ヴァースがヘンリー二世の庇護の元でアングロ・ノルマン語で著した、最初のノルマンディー公ロロの伝記『ロロ物語』(Wace, *Roman de Rou*, c. 1174) にも、アーサー王ロマンスの舞台となるブロセリアンドの森を巡って、昔は妖精や多くの驚異が見られたが、今は開墾されて驚異はもはや見つからないという述懐が存在する。[19]

こうした指摘は単に文学的トポスであるという解釈は可能である。ブルトン人への言及は、‘once upon a time’ と同様な、遠い伝説的過去を想起させるための中世後期の物語文学の常套表現であったと言える。「古のブルトン人が作ったレ」というような表現は、14 世紀初頭の写本で現存する中英語のロマンスの冒頭に常套句として登場するし、[20] またジェフリー・チョーサー『カンタベリー物語』(「バースの女房の話」) にも、「ブリトン人が非常な名誉として語っているアーサー王の古のころに、この国はすべて妖精で充ち溢れていました」といった表現が見いだされる。[21] しかし、驚異のエピソードを蒐集して詳述し、それを過去の出来事と位置づけるウォルター・マップやヴァースの考古家的な姿勢は意識的なものである。それは、理性的思考の結果としての驚異の減少を、歴史的時間軸上に置き換えることで受け入れようとすることに他ならない。言い換えれば、過去の出来事であるとしてしまえば、驚異が与える純粋な驚嘆は損なわれずに保存されるのである。

オルデリクスの「ヘルレキヌスの一党」の逸話から 200 年以上経過すると、幽霊の出自や位置づけをめぐる揺らぎはかなり解消されてくる。14 ～ 15 世紀にラテン語、フランス語、英語などの複数のバージョンで流通していたポピュラーな亡霊譚に、「ギー・ド・コルヴォの霊」(*Spiritus Guidonis*) として知られる話がある。

1323 年にアヴィニョン近郊のアレスの町でギーという名の市民が死んだが、その霊が埋葬後も八日間にわたって、目にこそ見えないが未亡人のもとに現れ続けた。未亡人は市内のドメニコ会修道院に助けを求め、そこの司祭（一説では説教例話集『天国の階梯』の作者ジャン・ゴビ）が幽霊

と対話をすることになる。

> さて「神の小羊」を唱え終わったとき、子供のようにか細い声で、アーメンという声がきこえたので、皆恐れおののいた。しかし司祭は、その声を聞くと、「聖霊と天国によってもたらされるあらゆる美徳にかけて、私は、神の被造物であるお前が、われわれの質問に答えるまでは、この場から去らぬように命じる」と言った。すると、幽霊は、以前よりは大きな声で、「司祭殿、質問があるなら急いで訊ねてくれ。私に許されている範囲でできる限りお答えしよう」と答えた。それを聞くと、人々は、何か霊的なものが実際に目で見られるのではないかと、わっと部屋の中にはいってきたが、声が聞こえるのみであった。司祭は全員を座らせると、まず、その声に向かって、お前は、良い幽霊か、それとも邪悪な幽霊かと訊ねた。すると、声は、「私は良い幽霊です。なぜなら、神の被造物は、それが造られたものである限りにおいて良いものなのです」と答えたのだった。[22]

司祭はこの最初の尋問によって、この霊が、悪魔によるまやかしではなく、神に許されて一時的に煉獄から帰還した、正当な存在であることを確認している。14世紀には煉獄の教義が平信徒のあいだに定着した結果、幽霊も、煉獄で浄罪をしている死者の霊が一時的に現世に戻ることを許された存在として、死後世界に居場所を与えられる。幽霊は浄罪の苦しみを訴えるだけで無く、煉獄の役割や有効な執り成しの祈禱などについても司祭と対話を交わす。ここには、オルデリクスに見られたような、地獄と煉獄の境界線上の死者の姿はない。幽霊はキリスト教死生観のなかに理性的に位置づけられて説明され、その存在は、この幽霊譚の目的がそうであるように、煉獄の教義とそれに付随する執りなしの有効性を教え広めるための格好の素材なのである。司祭は、おびえる未亡人を、「驚き恐れる必要はない。なぜなら、主は驚異をなし得るのだ。本当に神に仕える者たちの信仰をより強固なものとするために、このようにして、新しい事柄を示すこと

があるのだ」となだめるが、ここには奇蹟の遍在性という伝統的な考えが垣間見られる。しかし、司祭は、霊の存在を即座に奇蹟として受け入れるのでは無く、対話の場に多くの証人を置くことでこの出来事の信憑性を証明し、キリスト教教理の枠組みによる、驚異に対する権威づけをおこなっている。

このように、時代が下るにつれて驚異はより限定的なものとなってゆく。中世後期になると、理性的な説明が不可能な場合には、驚異の原因をそれを体験した主体に帰することがある。15 世紀の死後世界訪問譚が、しばしばヴィジョンを、睡眠中や重病で意識がもうろうとしているときに訪れたヴァーチャルな体験として描いていることはその端的な例である。

中世でももっとも広く読まれた死後世界探訪譚のひとつに、アイルランドのダーグ湖上の島にある死後世界へと続くとされた穴――「聖パトリックの煉獄」――に入り、一晩のうちに煉獄と地上楽園を旅する話が存在する。もっとも古いテクストは 1180-84 年頃にラテン語で記された『聖パトリックの煉獄譚』(*Tractatus de Purgatorio Sancti Patricii*) で、これは、ヴィジョンを体験したオウェインという騎士が一部始終をギレベルトゥスという修道士に語り、さらにそれをイングランドのソートレー（ハンティンドンシャー）のHという頭文字をもつシトー会士（H. of Saltrey）が記録したものとされている。そこでは、騎士のヴィジョンが実体験であったことがことさら強調されている。

> これらすべてのことを、頻繁に登場するかのギレベルトゥスが大勢の前で――実は私も聴いたのだが――、彼が騎士本人から幾度となく聴いた通りに物語った時に、聴衆の一人が、これらのことが実際に起こったかは疑わしいと申し出た。
>
> その人物にギレベルトゥスは言った。「最初に会堂に入った時、恍惚状態に陥ったのであって、これらすべて心の中で見たものだという人たちがいる。しかし、かの騎士自ら、それが彼の身に起きたことだとする説をきっぱりと否定し、彼が肉体の目で見、これら〔の責め苦〕

を肉体で耐えたことは断じて間違いないと証言している。」[23]

聖パトリックの煉獄探訪記は中世の終わりまで書き続けられ、さまざまなバージョンが存在している。15世紀初めに英語で記された『ストラントンのウィリアムの幻視』（*Vision of William of Stranton*）もそのひとつだが、12世紀の『聖パトリックの煉獄譚』とはひとつ本質的な違いが認められる。『聖パトリックの煉獄譚』ではオウェインが肉体を伴って煉獄を旅したことが強調されているのに対し、英語版のウィリアムは煉獄の入口となる縦穴に降りた後「少し眠り」、その直後にヴィジョンが訪れたと記されていて、ウィリアムの煉獄訪問は夢であった可能性が示唆されているのである。[24] このように主体のヴァーチャル体験と位置づけられることで、驚異の幅はさらに狭められることとなる。[25]

中世末期に向かうにつれて驚異は過去のものとなってゆくが、こうした変化の兆しは、過去に目を向けた12世紀の著述家にすでに認められたと言えるだろう。そこには、神の奇蹟は消えることも変わることもないが、驚異はそれを認識する人間と社会の変化とともに消えてゆく（解明されてゆく）という、一種の無常観にも近い感覚が、理性的思考の高まりと表裏一体となって読み取れるのである。しかし、そうであっても超自然は完全に消え去ることはない。むしろ、選別された結果として、どうにも説明不可能な驚異が残るのであり、それらは、煉獄を捨て去った近代以降のイギリスにおいては、ジャンルとしての ghost story を誕生させる基盤となってゆくと言えるだろう。

註

1　A. G. Rigg, *A History of Anglo-Latin Literature 1066-1422* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), p.1

2　cf. Brian P. McGuire, ‘The Cistercians and the Rise of the Exemplum in Early Thirteenth Century France: A Revaluation of Paris BN MS lat. 15912’, *Classica et Mediaevalia*, 34(1983), 211-67

3 Benedicta Ward, *Miracles and the Medieval Mind: Theory, Record and Event 1000-1215*, rev. edn (London: Scolar Press, 1987), pp. 3-4

4 アウグスティヌス『創世記逐語注解』XII.13.28. 訳文は『アウグスティヌス著作集 17』片柳栄一訳（教文館、1999），p.119 に拠る。

5 霊の識別は、中世後期の神秘家、特に女性神秘家の体験の性質をめぐって重要視される要素となる。Rosalynn Voaden, *God's Words, Women's Voices: The Discernment of Spirits in the Writing of Late-Medieval Women Visionaries* (Woodbridge: York Medieval Press, 1999) 参照。

6 アンセルムス『処女懐妊と原罪について』Ⅱ . 154. 訳文は『アンセルムス全集』古田暁訳（聖文舎 , 1980）, p. 593 に拠る。

7 C. S. Watkins, *History and the Supernatural in Medieval England* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007), p. 31

8 III, prefatio. Gervase of Tilbury, *Otia Imperialia: Recreation for an Emperor*, ed. and trans. by S. E. Banks and J. W. Binns, Oxford Medieval Texts (Oxford: Oxford University Press, 2002), pp. 558-59. 訳文はティルベリのゲルヴァシウス『皇帝の閑暇』池上俊一訳（青土社、1997）pp. 18-19 に拠る。

9 Jacques le Goff, *La Naissance du Purgatoire* (Paris: Gallimard, 1981), p. 392 / ジャック・ル・ゴッフ『煉獄の誕生』渡辺・内田訳（法政大学出版局 , 1988），p. 437

10 *The Ecclesiastical History of Orderic Vitalis*, ed. and trans. by Marjorie Chibnall, Oxford Medieval Text (Oxford: Oxford University Press, 1973), IV, 236-51

11 「ヘルレキヌスの一党」については以下を参照。Jean-Claude Schmitt, *Les Revenants: les vivants et les morts dans la société médiévale* (Paris: Gallimard, 1994), pp. 115-45 / ジャン = クロード・シュミット『中世の幽霊：西欧社会における生者と死者』小林宜子訳（みすず書房 , 2010），pp. 133-73. Alan E. Bernstein, 'The Ghostly Troop and the Battle over Death: William of Auvergne (d. 1249) connects Christian, Old Norse, and Irish Views', in *Rethinking Ghost in World Religions*, ed. by Mu-choo Poo (Leiden: Brill, 2009), pp. 115-62 (pp. 131-40)

12 Watkins, p. 185

13 Watkins, p. 26

14 Alexander Murray, *Reason and Society in the Middle Ages* (Oxford: Clarendon, 1978), p.10; M.-D. Chenu, *Nature, Man, and Society in the Twelfth Century: Essays on New Theological Perspectives in the Latin West*, ed. and trans. by J. Taylor and L. K. Little (Chicago: Chicago University Press,

1968)

15 *De Nugis Curialium*, dist. i, c.11; Walter Map, *De Nugis Curialium: Courtiers' Trifles*, ed. and trans. by M. R. James, rev. by C. N. L. Brooke and R. A. B. Mynors (Oxford: Clarendon, 1983), pp. 30-31

16 *De Nugis Curialium*, dist. iv, c.13 (Map, pp.370-71)

17 シュミット『中世の幽霊』, p.160

18 De Nugis Curialium, dist. ii. c.13 (Map, pp.160-61)

19 *The History of the Norman People: Wace's Roman de Rou*, trans. by Glyn S. Burgess (Woodbridge: Brewer, 2004), p.162

20 *Sir Orfeo*, *Lay la Freine* がその例で、2編ともアングロ・ノルマン語バージョンからの翻案である可能性が高い。cf. *The Middle English Breton Lays*, ed. by Anne Laskaya and Eve Salisbury, TEAMS (Kalamazoo, MI: Western Michigan University, 1995)

21 Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales*, III, 857-63. *The Riverside Chaucer,* ed. by Larry D. Benson, 3rd edn (Oxford: Oxford University Press, 2008). 訳文は、チョーサー『完訳　カンタベリー物語（中)』枡井迪夫訳　岩波文庫（岩波書店、1995)，p.42に拠る。

22 *The Gast of Gy: A Middle-English Religious Prose Tract Preserved in Queen's College, Oxford*, MS. 383, ed. by R. H. Bowers (Leipzig: Bernhard Tauschnitz, 1938), p.21

23 *St Patrick's Purgatory: Two Versions of Owayne Miles and the Vision of William of Stranton, together with the long text of the Tractatus de Purgatorio Sancti Patricii*, ed. by Robert Easting, EETS OS 298 (Oxford, 1991), lines 1097-1104.　訳文は『西洋中世奇譚集成：聖パトリックの煉獄』千葉敏之訳（講談社学術文庫、2010）pp. 158-59に拠る。

24 *St Patrick's Purgatory*, p.78 (line 22).

25 中世後期において、死後世界探訪譚が驚異を語るナラティブとしての性質を徐々に失い、死後世界を素材としたアレゴリーへと変容してゆく点については、松田隆美「ヴィジョンからアレゴリーへ――死後世界の断片化と中世の終わり」『中世主義を超えて――イギリス中世の発明と受容』松田隆美・原田範行・高橋勇編（慶應義塾大学出版会、2009），pp. 27-51参照。